



TITLE:

札幌から(北大の研究室より,<特集
>北海道大学)

AUTHOR(S):

渡辺, 昂

CITATION:

渡辺, 昂. 札幌から(北大の研究室より,<特集>北海道大学). 物性研究
1965, 3(4): 200-202

ISSUE DATE:

1965-01-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/85656>

RIGHT:

北大の研究室より

札幌から

渡 辺 昂（北大理）

もう雪が何度か降つては消え、降つては消え、今日も窓の外に、2, 3日前に降つた雪が淡く残っています。実は研究室の鈴木君とこの雪が根雪になるかどうか賭けたのですが、一体どうなるのでしょうか？ 勿論僕は消える方に賭けています。

僕が鈴木君と共に北大に着いたのは1964年の4月18日、まだポプラもエルムも枯木のように建物の蔭には黒ずんだ雪さえ見える頃でした。東京から車で札幌に向つた私は、盛岡を過ぎると寒くて1枚セーターを着、札幌に着いてしまった筈の冬服に着替え直した程でした。それがついこの間の事と思えるのですが、液化機のお守りと、研究室の建設に鈴木君と2人で夢中になっている間に、気がついたら冬が訪れていた！ 少し大げさに聞えるかも知れませんが、そんな気がします。

さて私共の研究室ですが、北大物理教室で最も規模の小さい研究室です。

助手の鈴木広良君。彼は1964年3月東北大物理平原研究室で大学院MCを修了後4月から私の研究室建設に参加してくれました。北大は春着いて間もなく、ADL社のストリータ氏に立合つたヘリウム液化機の試運転以後、机もドライバーも文字通り何もない処からスタートしてこの9月以降週1回宛定常的にヘリウムの液化をして低温での実験が可能になつたのも、彼の役割がなかったならば非常に難しかつたでしょう。外に大学院MC1年の高柳君、それに私。

研究室で手をつけはじめた仕事は、鈴木君が室温，窒素温度，ヘリウム温度で強磁性体のゼロ磁場共鳴の実験を定常法とスピネコーを使つて始めています。又高柳君は超伝導金属に磁気的不純物を入れた場合の仕事を直流法と、交流法の帯磁率測定ではじめています。今の処、磁気共鳴に使える中型マグネットがないので困っていますが、これも多分65年の3月頃には入るでしょう。

液体ヘリウムは現在磁気，分光，結晶物性，それに私達の研究室と毎回4，5人が汲んでいます。こちらに来て気がついたのですが磁気研等で特に、ヘリウム温度と窒素温度のいわゆる中間温度での帯磁率，磁気異方性測定の要望が非常に強く、磁気研のMC 2年の人達が中心になつてその予備テストを続けています。

こんな形で研究，液化もボツボツと軌道に乗りかかっている様に思われますが、何しろ私共の処は北大理学部物理極低温研究室として、昨年の春スタート台に乗った許りです。まだまだ年輪の数えられる他の研究室—北大許りではなく全国の大学の一と比べられるものではなく皆様方の豊かな経験から多くの御教示を期待しています。

さてこちらに来て感じたいくつかの事

(1) 研究室制度について

今北大物理では10数年に亘つて続けられてきた研究室制度の再検討がはじめられています。新しい組織には新しい考え方と積極的な研究態度が必要な事は云うまでもありませんが、講座増，学科増を伴つた組織の拡充と研究費の増大がない限り現状の打開は仲々難しいと思われれます。殊に後に“札幌時間について”でもふれますが、こちらではいろいろな品物の購入が仕難いだけでなく価格が東京に比べて高いと云う困難があります。

(2) 学部・教養の一体化について

この制度を正確に実行しているのは北大でも物理だけかも知れません。又全国でも北大物理と全く同じシステムをとつているのは他には私がこれまでに都立大くらいではないでしょうか。学部において教養の事が非常によくわかると云う点で、又教官の差別をしないという点で非常によいことです。然しその為講義の負担が非常に多くなつている点、北大の中でも改善の余地はありそうに思われれます。

(3) 雑用について

雑用が多くそれに追ひ廻されるのはどの大学でも同じかも知れません。然しこちらに来てからの事をふりかえつて見て、一体学部事務室と云うのは、研究を支える為にあるのだろうかと思いたくなります。パーキンソンの法則のなせる業でしょうか。

渡辺 昂

(4) 札幌時間について

一寸した品物を発注して手に入るまでに、早くて1ヶ月はかかります。業者が受注した品物がわからずに放り出したり、忘れたりと言うのはザラです。こうしたテムポのおそいことを鈴木君と“札幌時間”と云つて嘆いています。東京から遠く離れている為か、東京にいた頃自由に手に入つた電子回路部分品等慾しい品物が自由に、短時間で手に入ると言うことは先づありません。

北国ののんびりさともいうのでしょうか？ 一方支払いの回収は東京にいるときよりもきちんとしている様な気がします。勿論これはよいことです。要するに業者の規模も小さく、本州から離れて、北大の外に大きな工場、研究所も少く、札幌、否北大という狭い枠の中だけで商売をしているからでしょうか。それに品物がどうしても10～15%は平均して割高の様です。

これからも当分の間この“札幌時間”と“雑用”には悩まされそうです。然しけん燥な東京を離れて窓からポプラ並木に見える環境は仕事をする上で恵まれた場所であることもたしかです。